

## 宮沢賢治「ひかりの素足」論

黄, 英  
中国海洋大学外国語学院

<https://doi.org/10.15017/16048>

---

出版情報 : Comparatio. 10, pp.20-28, 2006-11-20. Society of Comparative Cultural Studies,  
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

## 宮沢賢治「ひかりの素足」論

黄英

「ひかりの素足」は、宮沢賢治初期の作品で、主人公の少年一郎は弟の樗夫と一緒に炭焼きの父親が働く「山小屋」にから家に帰る途中、雪嵐に会い遭難し、生死の境界をさまよう彼の夢の中に、鬼の居る地獄や「光りのすあし」の人の世界が現れ、結局彼はそこで弟を亡くして生還したという話がかかれていいる。

これまでは、他の作品、例えば「水仙月の四日」や「銀河鉄道の夜」との類似への言及が多く、また「うすあかりの国」「光の国」はどこなのか、そのイメージは何に由来するのかなどの問題もしばしば論じられてきた。近年の研究では、作品の構造や主題を中心に論じる傾向が見えている。例えば、山根知子は「宮沢賢治『ひかりの素足』試論——意識の深層をめぐる——」<sup>四</sup>において作品全体の構造や意識世界との関わりに注目し、それが「一郎を主人公とした瀕死体験の物語」だと指摘した。また、中地文は『ひかりの素足』——一郎とは誰か——<sup>五</sup>で、一郎という人物に焦点を当て、彼の子供ばなれした強い精神力と弟樗夫の純真無垢さに伴って露呈する弱さとを対照させ、大正期の童心文学の傾向と反対方向に居る賢治の姿勢を浮き彫りにし、物語が一郎を中心に展開されていくことの意味を明らかにした。

本稿は同じく一郎に注目し、以上の論究を踏まえつつ、一郎の強い精神力がどこから由来するのか、そこに樗夫の存在がどんな役割を担っているのか、また、なぜその夢の中に「うすあかりの国」や「ひかりの国」が出

現するのか、その部分の内容が作品全体の構造の中で如何に機能しているのか、などを検討し、「峠」の意味づけを試みたい。さらに、何故一郎だけが生還したのか、その理由及び生還の意味を他の作品との関連において問い直してみたい。

また、賢治文学において、理想世界を遙かな向こう側、天上にはなく、地上の現実世界にそれを求めるといふ傾向は早くも「ひかりの素足」にその芽生えが見られ、晩年の集大成と言われている「銀河鉄道の夜」、「ポラールの広場」にまで続き、しかもある程度の終結を見せた。本稿では「ひかりの素足」を中心に賢治文学に見られる現実世界帰還の系譜も追ってみたい。

### 一「峠」——試練と希望を与える場

最初に〈峠〉に注目した研究者は天沢退二郎である。氏は兄弟二人がなぜ遭難したのかという問題意識から出発し、「大きな象のやうな形」をした〈峠〉に付与された象徴的な意味——〈峠〉が他界指標でありえる——から二人の遭難が宿命的なものであることを主張した。中地文はこれを踏まえて、〈峠〉が遭難の場所だけではなく、試練を受ける場所でもあり、しかも、「もはや幼い子どもではない一郎に試練を与える場所として意味づけられていたのではないか」と年長の子どもへの試練の場として〈峠〉を意味づけている。〈峠〉で雪嵐に遭難し、生死をさまよう夢を見るといふ設定から見ても、現実的であれ、象徴的であれ、〈峠〉を試練を与える場と見るのは妥当であろう。が、遭難時〈峠〉で見た夢の内容に注目すると、ただ試練を与える場として機能しているだけではないと思われる。

試練とは試すために与える苦難であり、それが苦難であることが基本で

ある。作品において、現実世界での雪嵐との遭遇と、夢での鬼に追われる場面がそれに当たる。また中地が指摘したように、試練とは「耐えられるもの、そして乗り越えるもの」でもある。それを乗り越えることによって、次の段階に成長することとつながっていく。一郎がこの試練を乗り越えられたことは、分銅惇作は〈愛〉によると主張した。中地は一郎の精神力の強さがその〈愛〉の実践を保証したと補説した。いずれも一郎における内面の条件を強調したが、彼を囲む外部条件も注目に値するのではない。まず、一郎にとっての樫夫の存在意味について考えてみたい。

## (一) 樫夫の役割

従来の論では、しっかりといていつもリーダーシップを取る兄の一郎に比べて、弟の樫夫は年齢も小さいし、天真爛漫であると同時に、幼稚で泣き虫で、保護されなければならない弱い存在として位置付けられている。確かに作品中でこれを立証できる表現を探すとしたら、随所見つけることができる。が、問題はこのような存在であるだけに、一郎にとって大きな意味を持つのではないかということである。遭難前後の一郎の態度に注目してみたい。

一郎は(中略)思ったより雪が深くてたうたう足をさらわれて倒れました。一郎はからだや手やすっかり雪になって軋るやうに笑って起きあがりました(傍線は筆者)が樫夫(は)うしろに立ってそれを見てこわさに泣きました。

「大丈夫だ。樫夫、泣くな。」一郎は云ひながら又あるきました。けれどもこんどは樫夫がころびました。そして深く雪の中に手を入れて

しまつて急に起きあがりもできずおぢぎのときのやうに頭をさげてそのまゝ泣いてゐたのです。一郎はすぐ走り戻ってだき起しました。

(前略) 樫夫はひどく泣きだしました。

「泣くな。雪はれるうち此処に居るべし泣くな。」一郎はしっかりと樫夫を抱いて岩の下に立って云ひました。

雪嵐のなかで軋んだり迷つたりしたとき、弟の樫夫は泣いてばかりいるが、一郎はこの泣き虫の樫夫に対して、リーダーシップを発揮し、弟を守る兄として軋んでも笑いながら起きたように、決してつらい表情を表わさず、責任感の強い一面を見せた。が、峠で見た夢の最初の部分では違う一面が見られる。

一郎は自分のからだを見ました。そんなことが前からあつたのか、いつかからだには鼠いろのきれが一枚まきついてあるばかりおどろいて足を見ますと足ははだしになつてゐて今までもよほど歩いて来たらしく深い傷がついて血がだらだら流れて居りました。それに胸や腹がひどく疲れて今にもからだが二つに折れさうに思はれました。一郎にははかにこわくなつて大声で泣きました(傍線は筆者)。

これは遭難後見た夢の初めの部分である。このときそばに樫夫が居ないが、一郎はそれにまだ気づかず、意識が朦朧とするなかで自分の体の悲惨な様子を見て驚いたと同時に恐怖に陥り、いままですつとこらえてきた涙も自然に流れ出てきた。ここでの一郎は兄としての自覚はなく、単なる子どもとしての意識を自然に現した。目覚めたときは意識の領域であるならば、この夢の中は無意識の領域に属するだろう。ここでは一郎が無意識の

なかに子どもとしての弱い一面を露呈したに違いない。さらにこの無意識の中でも、樗夫という弟の不在に気付くと、一郎はいつそう堪えられなくなった。

「樗夫お。」一郎はくらしい黄色なそらに向つて泣きながら叫びました。  
た（傍線は筆者、以下同）。

しいんとして何の返事ありませんでした。一郎はたまらなくなつてもう足の痛いのも忘れてはしり出しました。すると俄かに風が起つて一郎のからだについてゐた布はまっすぐにうしろの方へなびき、一郎はその自分の泣きながらはだして走つて行つてぼろぼろの布が風でうしろへなびいてゐる景色を頭の中に考へて一さう恐ろしくかなしくてたまらなくなりました。

弟の樗夫の居ないことに気づき、泣きながら叫んだが、返事が無いため、一郎は樗夫の不在が一層確実のように感じ、とうとう堪らなくなつた。彼の足の痛みも忘れて走り出す姿には兄としての責任感の強い一面がまだ垣間見ることができないことはないが、それよりも、弟を失うことを恐れる兄の悲しさが一層あらわに現れているに違いない。それは後続の「恐ろしくかなしくてたまらなくなりました」という記述に明白に読み取れる。

以上のように弟樗夫の不在、或いは不在と感ずる瞬間に一郎は遭難時に現した強い一面は失せ、その代わりに目の前の恐ろしい場面に恐怖を感じたり、弟を失う予感に悲しみ、孤独、恐怖を感じたり、とうとう涙まで流れ出すほどの弱い一面を露呈した。

にもかかわらず、弟樗夫と再会できて、もう一度兄としての強い一面を發揮する。

一郎は歯を食ひしばつて痛みをこらへながら（傍線は筆者、以下同）樗夫を肩にかけました。（中略）まるでからだもちぎれるばかり痛いのを堪えて走りました。（中略）あまりの怖さに息もつまるやうにおもひました。それでもこらえてむりに立ち上がつてまた樗夫を肩にかけました。

それまで恐怖にとらわれていた一郎は樗夫と再会できて、再び勇気を出し、目の前の苦難に立ち向かうことができた。右の引用文で何回も繰り返された（堪える）という言葉は苦難に直面する勇気の印であろう。

では、なぜ一郎に再び勇気が湧いてきたのか。やはりここで樗夫の存在が大きな働きを果たしたからに違いない。一郎にとつて、樗夫はきわめて大事な存在であることは前述のとおりであるが、それは単なる愛すべき弟というよりもむしろ、弱い存在であるだけに、一郎の年長者としての責任感を自覚させ、勇気を湧かせてくれる存在でもあり、ある意味で精神的な支えにもなる存在である。精神的な支えであるゆえに、失うことを恐れているのだろう。したがつて、一郎が表した強い精神力は、弟への愛のみ由来するのではなく、精神的な支えでもある同伴者を失いたくないという強い意志によるものでもあるに違いないだろう。

## （二）「立派な大きな人」の出現

にもかかわらず、樗夫との死別は変えることのできない決まりごとである。それは絶対者として現前した（光のすあし）の「立派な大きな」人が言った言葉——「今にお前の前のお母さん（傍線は筆者）を見せてあげよ

う。お前はもうこゝで学校に入らなければならぬ。それからお前はしばらく兄さんと別れなければならぬ。兄さんはもう一度お母さんの所へ帰るんだから。」——から分かる。ここで、一郎に二番目の試験が与えられた。それは樞夫との死別から生じる悲しみである。

こうして一郎に与えられた試験が二つあることが分かる。一つは雪嵐の中で弟を棄てるかどうか。もう一つ、弟との死別の悲哀を乗り越えることができるかどうか。一つ目の試験は弟への愛と精神的な支えでもある同伴者を失いたくないという強い意志によつて、乗り越え、ある意味で自力で克服した。が、二番目の苦難を乗り越えることが、自力のみで達成できるのか。

これまで強い精神力を保てるのは弟を死なせたくないという強い兄弟愛があるからであることはすでに見てきたとおりであるが、しかし、弟との死別の時がとうとうやってきた。「お前も一度あのもとの世界に帰るんだ」と「立派な大きな人」が一郎に言った。このとき一郎の反応はただ手を合わせ目を伏せて立ってゐたのである。これは夢の最初の部分で一郎が樞夫を失うのではないかと狂ったように走った姿とは対照的である。あれほど樞夫の不在を恐れ、悲しんでいたのに、何故樞夫との死別を宣告されるこの時、こんなに穏やかな心を保てるのか。ここでは「立派な大きな人」の登場が肝心の役割を果たしたに違いない。

皆が闇のなかで極度の恐怖と苦しみに陥っている際に、「立派な大きな人」が登場した。その人はみんなが苦しむ理由を、昔それぞれ犯した罪によると言い、しかも、「こはいことはない。おまへたちの罪はこの世界を包む大きな徳の力にくらべれば太陽の光とあざみの棘のさきの小さな露のやうなものだ。なんにもこはいことはない」と説いて聞かせた。そして、子どもたちの傷ついた身体はたちまち治されてしまう。さらに陰惨な地獄の風

景を壮麗な浄土の景色に変えて見せた。

今までの赤い瑪瑙の棘ででき暗い火の舌をはいてゐたかなしい地面が今は平らな平らな波一つ立たないまっ青な湖水の面に変わりその湖水はどこまでつづくのかはては孔雀石の色に何条もの美しい縞になり、その上には「蜃」気楼のやうにそしてもっとはつきりと沢山の立派な木や建物がちつと浮んでゐたのです。(中略)それから空の方からはいろいろな楽器の音がさまざまの光のこなと一所に微かに降つて来るのでした。(中略)ある人人は鳥のやうに空中を翔けてゐましたがその銀いろの飾りのひもはまつすぐにうしろに引いて波一つたたないのです。すべて夏の明方のやうないゝ句で一杯でした。

この浄土のイメージの描写は法華経の寿量品自我偈の経文に拠ることは既に指摘された通りである。また「それは想像の世界ではあるが、架空のことではないようだ。信仰を支える内的リアリティを伴つた原風景(傍線は筆者)みたいなものとして、切に希求されていたの」である、宗教との関連から内的リアリティを認める論究もある。妥当な見解と思われるが、一つ補つておく点をあげてみたい。次の場面に注目しよう。

「此処はまるでいゝんだなあ、向ふにあるのは博物館かしら。」(中略)「うむ。博物館もあるぞ。あらゆる世界のできごとがみんな集まつてゐる。」(中略)「こゝには図書館もあるの。僕アンデルゼンのおはなしやなんかもと読みたいなあ。」(中略)「こゝの運動場なら何でもできるなあ、ボールだつて投げたつてきつとどこまでも行くん

だ。」(中略)「このチョコレートは大へんにいゝのだ。あげやう。」

右の引用文が示したように、そこにあるのは抽象的、宗教的なイメージのものばかりではなく、子どもが現実世界で関心を持っているもの、例えば、博物館、図書館、お菓子なども全部揃っている。ある意味でそこは現実性を帯びた理想郷であると言えよう。その後子ども達も立派に変身し、その理想の楽園を楽しんでいる場面が続いている。

このような理想世界を見せ、かつ体験させることによって、地獄に苦しんでいるみんなが救われることになった。もちろん樞夫を含めて。こうして、「立派な大きな人」の出現によって、樞夫を含めた皆が救われ、理想世界で楽しんでいくゆえ、一郎も弟を失う悲しみから救われたと言えるだろう。最後に目覚めた部分で、一郎の目に映った樞夫の表情は穏やかであり、その穏やかさは樞夫の表情ではあるが、一郎の目に映ったものであるため、一郎の内面をも示唆しているだろう。つまり、その穏やかさが一郎の内面において弟との死別の悲しみをすでに克服したことを物語っているに違いない。

しかし、一郎だけはその壮麗な理想世界に安住することはできない。したがって、この出現した理想世界は彼にとって、人生の中での一つの体験、或いは通過点に過ぎない。が、この体験は彼にとってこれから歩むべき道での一番貴重なものになるに違いない。それはこの経験が彼に大きな勇気と希望として将来の目標を与えてくれたからである。これは次の引用文から窺える。

「(前略)あの時やぶれたお前の足はいまはもうはだしで悪い剣の林を行くことができるぞ。今の心持を決して離れるな。お前の国には

こゝから沢山の人たちが行つてゐる。よく探してほんたうの道を探へ。」

これは「立派な大きな人」が一郎に諭す言葉で、一郎の取るべき行動と目標が教えられた。かつて一郎は二度も方向を間違えた。一度目は現実世界で、帰宅途中、一郎の判断ミスにより、峠で雪嵐に遭った。二度目は夢の中で薄明かりの国を目指したが、結局そこは地獄だった。そのため自分も弟も大変苦しめられた。今度は「立派な大きな人」が出現し、今後の歩むべき道を示してくれた。

注目したのは「その時やぶれたお前の足はいまはもうはだしで悪い剣の林を行くことができる」という一郎自身に起きた変化である。これは一郎が苦難のなか弟樞夫を棄てなかつたことへの、「立派な大きな人」からの加護と見てもいいし、一郎が二重の試練を乗り越えたことの証拠と見てもいい。要するに、今の一郎はすでに過去と違い、一段と強くなったのである。

さらに、「お前の国にはこゝから沢山の人たちが行つてゐる」に留意したい。「こゝ」はもちろん「立派な大きな人」が見せた理想世界を指し、また、そこから行く「沢山の人たち」は「立派な大きな人」の教えを受けつぎ、立派になった人たちのことを指すだろう。したがって、この理想世界から一郎が帰るべき現実世界にもう沢山の人たちが行っているということとは、一郎の将来の行動に協力してくれる同志、或いは現実世界で本當の道を教えてくれる師父がいることを意味するだろう。一郎にとって、これは単なる夢だけに終わらず、もっと現実性のある希望と勇気になるに違いない。

こうして「立派な大きな人」の出現によって、地獄に苦しんでいた人た

ちが救われ、一郎は弟を失う悲しみから救われると同時に、大きな希望と勇氣そして今後の目標が与えられ、将来歩むべき道に向けての準備も完成したと言える。したがって、「峠」は単なる試練を与える場だけではなく、望みや勇氣、目標をも与える場でもある。言い換えれば、「峠」は試練と希望を与え、一郎の成長を促す装置として機能していることになる。

## 二 現実世界帰還の宣言へ——「銀河鉄道の夜」に触れて

前述のように一郎は「峠」で通過儀礼を受け、「本当の道を探す」という使命を背負い、いっそう強くなった身で現実世界に戻ってきた。

では、何故一郎だけが現実世界に戻ることになったのか。

分銅惇作は前掲論文で、「(光のすあし)の人、法華経寿量品の仏如来」が登場し、「弟を最後まで棄てようとしなかった兄」を「その愛の行為によって、救済」と述べ、一郎が救われた理由は彼が実践した「愛の行為」にあると主張した。さらに、この作品で「注目されるのは、救われたのは一郎ひとりではなく、樞夫もその他の子供らでもある」と指摘した。

氏が言う一郎にとつての救済は現実世界への生還であるかのように見えるが、実はそうでもない。氏が言う「救済」は全員にかかわったものであるため、一郎一人だけが生還するという一郎個人に限ったことを指すはずはなからう。また、全員が地獄苦から救われたということから、一郎にとつての救いもそれにあたるだろう。ただし、一郎にとつての地獄苦はただ鬼に鞭打たれ、剣林に足が傷つけられることだけを指すのではなく、愛する弟が苦しめられるのを見ること、愛する弟と死別することもそこに含まれているに違いない。

右のように、氏は「救済」に注目し、一郎の救われる理由に触れたが、

その救われることは生還を指すのではない。生還の理由にも触れなかった。筆者は一郎の生還の理由を問うべきではないかと考える。次に以下のくだりに注目したい。

夢の中で樞夫が鬼に追われ、鞭打たれたとき、一郎は「私を代わりに打ってください。樞夫はなんにも悪いことがないので」と、樞夫を苦しめる理由がどこにもないと叫びだした。これに対して、鬼は「罪はこんどばかりではない」と答えた。ここに前世の行動がこの世の運命を決めるという業の思想が見られる。後に現前した「立派な大きな人」も基本的に前世の罪というものを認めた三三のである。ここに業三三というものの働きが基本的に認められているということが伺えよう。同じ方法で類推すれば、一郎の生還も運命の定めという見方も成り立つのではないか。そこで、次の記述に注目したい。

「お前も一度あのもとの世界に帰るのだ。お前はすなほない子供だ。よくあの棘の野原で弟を棄てなかつた。(後略)」

これは「立派な大きな人」が一郎にもとの世界に戻るべきであることを告知するくだりである。この話のなかで、後続の部分の内容——「お前はすなほない子供だ。よくあの棘の野原で弟を棄てなかつた」——がもとの世界に戻ることに理由であるかのように見えるが、実はそうでもない。よい行動をすることによって、よい果報を受けるという因果関係式は、ここでは存在しない。ここで、みんなが救われ、みんなが楽になったのだから、元の世界に戻ることは必ずしもここに住することより上位にあることでもない。よって、元の世界に戻ることは善行への善果になるとは限らない。一郎の生還は善行への果報ではない。むしろ、現実帰還は一郎の運

命であるとも見てもいいのではないか。「立派な大きな人」が一郎の帰還の理由について何も語らないのは、それが変えられない運命である以上、帰還そのこと自体に対する何かを説明する理由がどこにもないからであろう。

が、だからと言って、何もかも運命に任せるわけにもいかない。決められた運命のなかで、如何に本当の道を歩むかの大事さが説かなければならぬ。これこそ「立派な大きな人」が一郎に語った話の真意であるに違いない。

現実帰還が運命であることは「銀河鉄道の夜」のジョバンニの行方についても言える。ジョバンニは現実世界へ帰還したが、利他行為を實踐したカムパネルラは生還できなかった。こういう設定からも現実世界帰還は利他の愛の行為によるものではなく、ただ運命であることが再度裏付けられる。

こうして、この一郎の生還理由を問うことによって、「運命」という言葉が浮上した。一郎の生還も運命の定めであることがわかった。しかし、肝心なのはそれを宿命的に捉えるのではなく、既定の運命のなかで、如何に本当の道を歩むかということである。だから、未来の本当の道を歩むのに備えて、試練や希望を与えることも必要になる。作品の構造——「薄明かりの国」と「ひかりの国」の両部分が前後して出てくる——も、試練とともに希望や目標も与える設定となつてゐる。試練や希望を与えることは、運命任せではなく、運命の中で如何に積極的に本当の道を求めるかが大事であることを示唆している。

以上のように、元の世界つまり天上でもなく、地獄でもなく、地上の世界で本当の道を探すべしと諭され、それに備える人間として、少年一郎が成長した。作品は一郎が目覚めて生還して、樗夫が死んだところで幕を閉じた。少年一郎のその後の行方は語られていないが、結末に樗夫の穏やか

な表情に象徴された一郎の内面からは、彼は決められた運命の中で、諭された通りに積極的に行動するのではないかとの予測はつくだろう。

次に「銀河鉄道の夜」と関連して見ていきたい。

前述のように、死の世界を夢で体験して最後に現実世界へ帰還するという構成上の類似から、「ひかりの素足」はしばしば「銀河鉄道の夜」の予告編として論じられてきた。この論点を重複するつもりはないが、現実への生還が運命であることはすでに検討してきたとおりである。注目したいのは、その生還のあり方の相違である。

「あたしたちもうこゝで降りないといけないのよ。こゝ天上へ行くところなんだから。」

「天上へなんか行かなくなつていゝぢやないか。ぼくたちこゝで天上よりもつとよい」(傍線は筆者)とこをこさへなければいけないって僕の先生が云つたよ。」

これはクリスチャンの青年が連れてくる女の子とジョバンニとの会話である。注目したいのはジョバンニが持ち出した先生の話——天上よりも地上でよりよい理想郷を作るべしという趣旨の内容——である。これはジョバンニがクリスチャンの青年が降りるときに、彼らを引き止めるために言い出した言葉ではあるが、ただの場合当たりの便宜上の発言とは思われぬ。先生が教えた言葉をそのまま身に染みて理解しているとも考えられぬ。先生が教えた言葉が曖昧な形ででも心のどこかに収められていることは言えよう、さもないと、こんなときに口に出すはずはないだろう。

このように、先生の話に見られた(天上より地上で)理想郷を求めると

いう指向は「ひかりの素足」の場合より、いつそうはつきりした形で現れてきたと言えよう。

しかし、この天上よりいいところはどんなところなのかは、はつきり語られなかった。ただ、次のジョバンニとカムパネルラの会話からそれを匂わせたものを垣間見ることができる。

「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一緒に行かう。僕はもうあのさそりのやうにほんたうにみんなの幸のため（傍線は筆者）ならば僕のからだなんか百べん灼いてもかまはない。」（中略）「けれどもほんとうのさいはひは一体何だらう。」ジョバンニが云ひました「僕はわからない。」僕たちしつかりやらうねえ。」ジョバンニが胸いっぱい新しい力が湧くやうにふうと息をしながら云ひました。（中略）「僕もうあんな大きな暗の中だつてこはくない。きつとみんなのほんたうのさいはひをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行かう。」

ここで、蠍の話が出てくる。それはジョバンニらが銀河の旅の途中で聞いたみんなの幸せのために自分の体を捧げる話である。ジョバンニはその話に感銘して、蠍のようにみんなの本当の幸せのために自己を犠牲にしてもいいぐらいの覚悟で努力して行きたいことをはつきりと言葉にする。みんなの本当の幸せが何であるか分からないとは言ふものの、「みんなのため」という意識ははつきり見られる。これは「ひかりの素足」では見られないことである。つまり、「銀河鉄道の夜」になると、ただ一人の親族（友人）のためだけではなく、広く人々のための利他行為の実践覚悟があらわになったと言えよう。

とはいえ、運命的に使命を背負つて生還してきた主人公たちの精神状態はだいたい違ふ。「ひかりの素足」の一郎は二重の試練——遭難中ずつと弟を棄てなかつた。さらに、弟の死を乗り越えた——を受けて、精神力がパワ—アップし、未来の険しい道に備えた状態で生還してきたが、「銀河鉄道の夜」のジョバンニの様子は相当違ふのである。

まず、夢の最後にカムパネルラと別れた際、「ジョバンニはまるで鉄砲丸のやうに立ち上がりました。そして誰にも聞こえないやうに窓の外へからだを乗り出して力いっぱいはげしく胸をうって叫びそれからもう咽喉いっぱい泣き出しました」と、ジョバンニは消えた友人をもう一度引戻そうとしたが、心の中は「もうそこらが一ぺんにまつくらになったやうに思ひました」と表現されているやうに、真つ暗な深淵に落ちたと同様な感覚であるに違ひない。

また、ジョバンニは夢から目覚め、カムパネルラの死を知らされたが、「ぼくはカムパネルラの行つた方を知つてゐますぼくはカムパネルラといつしよに歩いてゐたのですと云はうとしましたがもうのどがつまつて何とも云へませんでした」、「もういろいろのこと胸がいつばいでなんにも云へずに（中略）一目散に河原を街の方へ走りました」とあるやうに、友人がもう現実世界にいないことを分かつていながらも、それを事実として受け止めることは彼にとつてそれほど悲しいことであつた。

「ひかりの素足」の結末で、死んだ樞夫の穏やかな表情で象徴された一郎の弟との死別の悲しみからの超越が見られることは、すでに確認したとおりである。これは右の「銀河鉄道の夜」の結末のジョバンニの悲しい姿と対照となつている。前の引用文に見られるやうな将来の抱負と心構えを語つたものの、道連れの友人との死別の悲しみをいまだに乗り越え得なかつたことが窺えよう。一郎の場合は宗教的な、教訓くさいところがあると

するならば、ジョバンニの場合はもつと血の通った生身の存在であると言えよう。

「立派な大きな人」が論じた言葉——「よく探してほんたうの道を習へ」からも分かるように、「ひかりの素足」の一郎はまだ未来の本当の道を「探す」段階にある。また、「銀河鉄道の夜」のジョバンニも「みんなのほんたうの幸いはなんであるかわからない」とあるように、みんなの幸福のために努力する覚悟はできているが、その目標はまだはつきりと表出できず、一郎と同じく、いまだに、「探す」<sup>一四</sup>状態にあると言える。が、「ポラーノの広場」になると、「探す」から「作る」へ、しかも、精神的な覚悟より一歩進んで具体的な形の理想郷の模索が始まり、ある程度の成功を収めたように描かれている。さらに、現実世界での諸矛盾も盛り込まれ、もつと多様な要素がそこに含まれている。その辺りについての詳細な検討は後日に譲りたい。

- 一 作品の成立時期は不明だが、初期のものと推測されている。
- 二 本論における作品引用はすべて『新校本宮沢賢治全集』（筑摩書房 一九九五年九月）によるもので、ルビは省略した。
- 三 例えば、寺田透が「宮沢賢治の童話世界」（『文学』一九七四年二月）で、『水仙月の四日』と『ひかりの素足』は、かくて、わが国の雪風を描いた文学作品として当然最高のものになったのである」と評した。
- 四 「国文目白」三二号 一九九一年十一月
- 五 「国文学解釈と鑑賞」二〇〇〇年二月
- 六 『ひかりの素足』——浄土のイメージについて——（『国文学解釈と鑑賞』一九八四年十一月）
- 七 前掲論文。氏が一郎の精神力の強さの表現として、鬼の目に吸い込まれなかつた例をあげた。
- 八 中地文はこの見解を示す代表的な研究者の一人である。氏の前掲論文で楳夫

のその性質の表現が数多くあげられている。

九 内容は次のようである。「我此土安穩 天人常充滿 園林諸堂閣 種種宝莊 殿 宝樹多花果 衆生所遊樂 諸天擊天鼓 常作衆伎樂 雨曼荼羅華 散 仏及大衆」（岩波文庫『法華経 下』（岩波書店 一九九一年六月）による、ルビ省略）

一〇 分銅惲作前掲論文八〇頁

二 法華経では仏国土から娑婆世界へ衆生を普渡するために、たくさんの菩薩が赴いていることが説かれている。

三 ただし、「立派な大きな人」はまた「こはいことはない。おまへたちの罪はこの世界を包む大きな徳の力にくらべれば太陽の光とあざみの棘のさきの小さな露のやうなものだ。なんにもこはいことはない」と説き、その罪も「大きな徳の力」によつて包容され、許されるはずであるとみんなに教えた。罪を許さないという鬼の態度と全く違ふ。ゆえに「立派な大きな人」が説きたいのは前世に罪があるからといって、希望をなくしてはならないということであろう。

三 業は行為を意味し、現在における苦、楽の経験は過去になした業の果報であり、現在の業は余力を残し必ず未来に果報をもたらすというように、過去、現在、未来にわたつて人間の生存を規制している。が、大乘仏教の場合、業を宿命的に捉えるのではなく、輪廻的存在を超える自らの宗教的な体験を基盤としつつ、解脱への道を説く。（上山春平ら編『仏教の思想』（中央公論社 一九七四年六月）一三四頁〜一五二頁参照）

四 ジョバンニの持ち出した先生の話の中では「こさえる」という言葉が含まれているが、まだ本当の幸せの具体的なあり方ははつきりしていないジョバンニにとつて、それはまだ先のことであり、今現在のジョバンニはそれが何であるかを探す段階にある。